

昭和戦前期青年学校における 『古事記』の教材化に関する考察

棚田 真由美

(2002年9月30日受理)

A study of "Kojiki" as teaching materials in Showa prewar days at youth school

Mayumi Tanada

The aim of this paper is to examine how "Kojiki" was made to teaching materials in Showa prewar days. I deal with textbooks of youth school. "Kojiki" in textbooks have two characteristics. The one is that "Kojiki" was used to examine the form of the nation. For this aim, "Tensonkōrin" and "Jinmutennō" were selected. The other one is that "Kojiki" was used to make students have the loyalty. For this aim, "Yamatotakeru", "Tajimamori" and "Ototachibanahime" were selected.

Key words: showa prewar days, "Kojiki", youth school, form of the nation, loyalty, explanation

キーワード：昭和戦前期、『古事記』、青年学校、国体、忠誠心、解説文

I. 研究の目的と方法

昭和戦前期の国語教科書の教材には、戦時下という状況を受けての編集者の意図が大きく、そして見えやすく反映されているのではないかと考えられる。そのような中で、日本最古の歴史書とされる『古事記』は、国語教科書にどのような目的のもとで、どのように採録されてきたのか、これまでさまざまな学校種の国語教科書について調査、考察してきた。その中で、次のようなことが明らかになった。

まず、尋常小学校・国民学校初等科では、『古事記』上巻の神々の話を中心に体系的な採録が行われ、神の話に自然に親しませることが目指されていた。次に、国民学校高等科では、神武天皇、ヤマトタケル、スサノオなどの戦う英雄が重視され、生徒の持つ英雄像の模範となることが目指されていた。そして、中学校でも、国民学校高等科と同じく、神武天皇、ヤマトタケルなどの戦う英雄が採録され、戦意を昂揚させるとともに、タジマモリという模範的な臣下像も採録され、忠誠心を教えようとしていた。高等女学校では、ヤマトタケルの后であるオトタチバナヒメを中心に採録が行われ、天皇の命令遂行という大義のために自己犠牲の精神を

教えようとしていた。師範学校では、『古事記』を全体的に採録し、国民学校の教師としての教養をつけさせ、また模範的な皇国民として育てようとしていた。

このように皇国民育成という大きな目標は同じでも、それぞれの学校が対象とする生徒の違いによって、学校種ごとの採録の特徴が明らかになった。

そこで今回は、兵役予備軍としての役割を果たしていたため、皇国民育成という意図が表れやすいと思われる青年学校を取り上げ、青年学校教科書において『古事記』がどのように採録されていたかを明らかにすることを目的とする。

研究の方法としては、青年学校の教科書に採録されている『古事記』に関わる箇所を調査し、他校種とも比較しながら、その特徴を考察する。

II. 『古事記』教材化の実態

青年学校教科書における『古事記』の採録状況を、表1、2にあげる。

青年学校においては、『古事記』の原文だけでなく、『古事記』の内容の一部を用いた物語形式の再話や詩、解説文なども採録されている。本研究では、

『古事記』の教材化の考察対象として原文以外のものも含めることとし、『古事記』からどの人物や話題が取り上げられているかを表1に示した。次に、その形式を表2に示した。

この表に基づいて、以下でその特徴的なことを考察する。

表1

内容 ¹⁾	種類・冊数 ²⁾
別天つ神	2種 4冊
イザナキイザナミ	6種 2冊
アマテラス	11種 28冊
スサノオ	4種 7冊
オオクニヌシ	6種 2冊
ニニギノミコト	24種 51冊
神武天皇	27種 83冊
崇神天皇	2種 6冊
垂仁天皇	2種 5冊
タジマモリ	1種 3冊
ヤマトタケル	8種 11冊
オトタチバナヒメ	2種 5冊
神功皇后	2種 6冊
成務天皇	1種 1冊
応神天皇	2種 2冊
仁徳天皇	2種 8冊
古事記	5種 14冊

表2

文章形態 ³⁾	種類 ⁴⁾
原文	4種
物語	7種
詩	8種
解説文	42種

この表から、青年学校において『古事記』は、原文ではほとんど採録されておらず、『古事記』の内容の一部を使った解説文による採録が多いことがわかる。

その解説文で取り上げられる内容は、アマテラスからニニギノミコト、神武天皇へという神勅による支配の連続性、神武天皇の東征などである。

次に、物語として取り上げられているのは、ヤマトタケル、タジマモリ、オトタチバナヒメなどの人物の話である。

ここから、採録している話題には、国体観念を育成

しようというねらいと、忠誠心を育成しようという二つのねらいがあると考えられる。そのことについて、以下でくわしく見ていく。

1. 国体観念の育成

(1) 天皇支配の正当性—神勅

『古事記』の教材化として、青年学校の教科書において目立つのは、「国体」に関する解説文に利用されているものである。これは、国民学校、中学校をはじめとしたすべての学校種で大きく取り上げられていた教材化の方法であるが、青年学校では特にこれを特徴的な教材化の方法としてあげることができる。

具体的には、青年学校教科書に、次のような国体を説明する文章が採録されている。

天照大神 我が大日本帝国の基は皇祖天照大神がお定めになったのである。大神は高天原にましましてこの国土をお治めになったが、大神は御徳の極めて高い御方で、その御恵の広大なことは恰も太陽が万物を照らし、これを成長させるやうであったから、別名を日の神とも申し上げた。大神はかやうな尊い大御心・大御業を永遠にこの国土に現し給ふ思召で、御孫瓊瓊杵尊をお降しになられ三種の神器を授け給ひ神勅を下し賜うた。

豊葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣。宝祚の隆えまさむこと、当に天壤と窮りなかるべし。

この御神勅は我等日本国民が永久に仰ぎ奉るべき肇国の大精神であり、万世一系の天皇がこの国土・万民をすべしらしめされるといふ千代万代に動かぬ国体の基がここにはじめて確立せられたのである。

神武天皇 瓊瓊杵尊の御曾孫に当らせられる神武天皇は、天照大神の肇国の大精神を継がせ給ひ、その御理想を先づこの葦原の中国に実現しようと思召されて、御東征を実行遊ばされた。かうして天皇は大和地方をお平げになったのち、都を畝傍山の東南櫃原にさだめて宮をお造りになり、三種の神器を奉じて、御即位の礼を挙げさせられ、宮門を開いて、その有様を諸民に拝観させ、皇威の尊厳を仰がせられた。此の時天皇は、上は大神の御徳に答へ、下は正しい心を養ひ、六合を統べ、八紘を宇となすことが、世をしらしめし給ふ御理想であると宣り給うた。これは天照大神が御孫瓊瓊杵尊をお降しになった大御心に基づく我が国政治の理想をお宣べになったものであって、それ以来御歴代の天皇は皇祖皇宗の遺訓に遵ひ、この御理想を以て国家統治のおきてになされた。かやうにして天照大神の肇国の御精神は、

天壤と共に窮りなき万世一系の天皇によって永遠に継がせられ、日本史はこの御精神に基づいて展開せられたのである。即ち日本はこれを国内的に見れば、万邦無比の皇道を樹立し、この皇道に忠順であることによって今日の隆盛を来し、また未来に発展する国であり、また対外的に見れば進んでこの皇道を世界に弘め、世界をして天皇の御恩沢に浴さしめるのが日本の務であることを知らねばならない。随って日本の歴史は常にこの両方面から考へねばならないのである⁵⁾。

この中では、下線部にあるように、「我が大日本帝国の基は皇祖天照大神がお定めになったのである」、「大神はかやうな尊い大御心・大御業を永遠にこの国土に現し給ふ思召で、御孫瓊瓊杵尊をお降しになられ三種の神器を授け給ひ神勅を下し賜うた」、「瓊瓊杵尊の御曾孫に当らせられる神武天皇は、天照大神の肇国の大精神を継がせ給ひ、その御理想を先づこの葦原の中国に実現しようと思召されて」と、『古事記』に描かれているアマテラスからニニギノミコトへ、そして初代神武天皇へという統治について述べ、これを、「万世一系の天皇によって永遠に継がせられ、日本史はこの御精神に基づいて展開せられた」というように、国体の根本として説明している。

このように、『古事記』の中の、「天孫降臨」、「国譲り」、「神武天皇の東征」、「神武天皇の即位」などの記事を使って、アマテラスやニニギノミコト、神武天皇を祖先とする天皇が、国家統治を行うという国体の起源や正当性を説明するという教材化がなされていた。

(2) 君臣の区別—天孫降臨

さらに、(1)にあげた国体の説明として、天皇統治という面だけではなく、天皇に仕える臣下についての言及も見ることができる。

初に降る天の菩比の神は、出雲氏の祖先神、次の天若日子は、後の世までも伝説に現れる人物で、当時の民間伝承が歴史的体系の中に取り入れられたもの。最後に降る建御雷の神は、さきに伊耶那岐の神が、火の神迦器土を斬った時に出現した神、刀剣の精霊で、中臣氏藤原氏の守護神である⁶⁾。

ここでは、「天の菩比の神は、出雲氏の祖先神」、「建御雷の神は中臣氏藤原氏の守護神」と、国譲りに関わったり、天孫降臨の際に付き従った神々を天皇家に仕えた氏族の祖として取り上げてあり、神代と人代とを臣下の血筋においても連続させている。

また、次の資料でも、天孫とそれ以外のものは、それぞれの血筋があるということが述べてある。

此の太古の国民の精神には、明かに君臣の分が定つてゐる。天孫の御血統が即ち帝位を継ぐべき種で、

其の余のものは皆この国土に居て其の下に服従すべき種と定つてゐる⁷⁾。

ここからは、先に見られたような、天皇とその臣下という君臣の区別が、神代からのものであり、国を統治する君主に、臣下が仕えることは、今も当然なのであるという論を読みとることができる。つまり、『古事記』を用いて、臣下である国民が天皇に仕えることの正当性が述べられているのである。

(3) 君主の姿の優位性—ニニギノミコト、神武天皇

このような日本の国体を独自のものとして、その独自性を強調するために用いられる手法が、日本と外国を比較するというものである。それは、以下のようなものである。

建国創業の君であらせられた瓊瓊杵尊にしても、神武天皇にしても、常に天照大神の御教を守つて、その聖徳を以て人民を感化せられたことは、古典に考へて知られるのである。外国の歴史に見えるやうに、単に武力一片で、暴圧的に服従せしめたのではなかつたのである⁸⁾。

ここでは、日本の君主の代表としてニニギノミコトや神武天皇を示し、彼らによる統治が、徳によるものであり、武力による征圧ではなかつたのだと述べている。このように、『古事記』中のニニギノミコトや神武天皇といった君主像を使って、外国との国体や君主の性格の差を示すことにより、日本を徳のある天皇をいただく特別な国、外国より優れた国として提示しているといえる。

(4) 『古事記』と昭和戦前期当時のつながり

—神武天皇

(1)から(3)のようにして、『古事記』によって説明された国体は、次に、現代に通じるものであるということが強調される。そのために利用されているのが初代天皇の神武天皇である。これは、以下のような詩の表現に見ることができる。

神武神聖のわが皇祖
日本の基を建ててより、
連綿として伝はれる
二千余年の帝国よ、
皇統一つの系にして
一百二十四代数ふ。(後略)⁹⁾

この詩では、神武天皇が日本の基礎を築いた人物として登場し、「皇統一つの系」という表現によって、その国が、初代神武天皇から歴代の天皇、そして昭和戦前期当代の天皇まで続いていることを述べている。また、次の資料は、神武天皇が天皇の位に即位する場面を詳しく描いたものである。

(前略) その畝傍の麓の櫃原で、今日神武天皇が

初めての御位にお即きになるのである。宮は新しく御造営になったので、荒木のまゝの木の香がすがすがしく胸にしみ、あたりは塵一つとゞめないまでに浄められてゐる。まだ人智が開けず、鳥のやうに木の上に巢を作って住み、獣のやうに穴を掘って隠れてゐたその時代の国民が、今までのあたりこれを仰ぎ見て、どんなに驚きあがめたことであらう。この宮を営まれるに当って天皇は仰せられた。

「時代と共に推移って、少しでも万民の幸福を進めて行くのが聖人の道である。我々はいつまでも野蛮な生活に安んずべきではない。まづ模範を示すため、ここに山林を開いて宮殿を造り営み、天皇の位に即いて大御民を治めようと思ふ。これこそ遠く皇祖天照大御神がこの国を授けられ、近く皇孫瓊々杵尊がそれを承けて伝えられた思召にかなふものである。やがてこの大和の都を全国の都とし、天下をあげて民と共に住む広い家とすることは何といふ喜ばしいことであらう。」

万民を子としていつくしまれる暖かい聖人の御心と、四方に向かって国を開かうとなされる勇ましい英雄の御志と、二つながらこの畏い大詔の中に拝されるのである。

(中略)

時は紀元元年正月朔日、かくして大日本帝国の基礎は、盤石のやうに堅固に定まったのである¹⁰⁾。

この神武天皇の即位についての文章の、まとめの部分である「かくして大日本帝国の基礎は、盤石のやうに堅固に定まった」という表現によって、現在の日本の基盤を神武天皇に求めているといえる。

また、『古事記』の世界と現代との連続性を更に強調するために用いられるのが、神武天皇の事績の中でも、国内平定のために各地の支配者と戦った東征である。以下の資料では、昭和15年当時の戦争を、神武天皇の戦いと重ねて表現している。

私どもはこの創業の大きな御仕事を仰ぎまつるときに、いよいよ肇国の大精神を発揮することにつとめて、聖恩に応へ奉らねばならぬと存するのであります。只今の支那事変もまた、この肇国の大理想を二千六百年後の今日に於て顕さんとしてゐる国民的努力の一つにほかならぬのであります。

(中略)

今回の事変は、名は事変と申しましても、日本の歴史始って以来の大戦争であります。帝国が従来経験したもろもろの戦役とは比ぶべくもありません。強ひて例を国史に求めれば、ちゃうど神武天皇の御東征にも比すべきではないでせうか。神武天皇が御親ら軍を率ゐて日向の国を御進発あそばされて以来、

檀原の宮に即位の礼を挙げさせ給ふまでに、天皇は申し上ぐるまでもなくこれに従ひ奉ったもろもろの人々の当時の艱難辛苦は実に想像も出来ぬほどであったであります。おそらくは今日の事変に幾倍するものがあつたらうと思はれるのであります。さうした艱難辛苦の結果が、御創業の完成となつて、今日の日本を築きあげる基となつたのであります。しかも、今日の日本は奇しくも肇国の大精神を力強く顕すべく、四年越しの支那事変として戦ひつゝあるのであります。二千六百年の昔を偲びますときに、我が大和民族が二千六百年の伝統の勇猛心を、今日に於て再び振るひ起さねばならぬのであります。支那事変は、積年の禍根を断つて、東亜永遠の安寧と福祉とを確保せんとする発展的日本の大事業であり、同時にまた、世界平和の確立に寄与せんとする肇国以来の大精神の顕現であります。かうした大事業は、神武天皇御創業当時の艱難辛苦なくしてはたうてい出来ようはずがありません。

私どもは、この四年越しにその覚悟を以て戦ひ勝つべく今日まできたのであります。一人でも悲鳴をあげる者があつて、この大事業にひゞをやらせてはならないのであります。生を稜威のもとに享くる者、挙つてしっかりと手を組んで、二千六百年の昔を今に顕さねば已まぬのであります¹¹⁾。

つまり、下線部の、「只今の支那事変もまた、この肇国の大理想を二千六百年後の今日に於て顕さんとしてゐる」という表現や、「今回の事変は」、「ちゃうど神武天皇の御東征にも比すべき」という表現にあるように、昭和の時代における戦争を神武天皇の東征の流れを汲むものとするによって、この戦いを正当化しようとしているのである。

(5) 『古事記』による国体説明の根拠付け

以上、(1)から(4)のように、国体の説明のために『古事記』に現れる人物や出来事を使っているのだが、『古事記』を説明に使うことの根拠や正当性についての記述も青年学校教科書に見ることができる。まず、『古事記』そのものがどのような作品として考えられていたかを示す。

我が肇国の歴史を、国語を以て記された貴い古典¹²⁾

ここからは、『古事記』を国の始まりの歴史を書いた作品とみなしており、しかも「貴い古典」という位置づけまでされていることがわかる。

次に、『古事記』に書かれている内容と、その意義については、こう述べられている。

記す所は神代天地開闢に始まり、推古天皇に終る。其間天皇の御一系を中心として、あらゆる古伝説を

統べ、しかも努めて古語のままに記すを以て、古伝説の面目最もよく伝へらる。即ち天地開闢に当りて造化三神の御出現より、伊耶那岐・伊耶那美神の国生み神生みの御伝説、更に天照大御神、素戔鳴尊の御物語、大国主神の国土献上、皇孫瓊瓊杵の尊の降臨等、肇国の大本悉く物語られ、国体の根元一にここに明かなり。降って人代となるや、神武天皇の御東征より、歴代天皇治国の大御業、例へば崇神天皇の敬神の御事績、仁徳天皇の愛民の御仁慈等もみな伝へられ、天皇経国の本義、延いて臣民翼賛の大義亦ここに明かなり。

かかる中心一系の統一理念は、畢竟するに神国日本の国体の根本義を明かにするものなるが、それと共にかかる古伝説並びにそれに関係して記されたる古物語により、国民精神原始の姿態を窺ひ得べし。生成発展して止まざる精神、明朗闊達にして広き心、豊かに潤ひある情操の如き傾向は甚だ乏し。実に吾等は古事記に於いて我等国民の精神の故郷を見出すものとすべし。外国の文化固より採るべしと雖も、そは吾等本然の魂を生長せしむる糧とすべきものなり。吾等は古事記の如き古典に於いて我国体本然の姿態、又同時に吾等国民の本然の心の最も素朴純粹なるものを見出し、毎にこの根元に顧みることにより、世界文化進展の中に処する吾等自身の立場を明確ならしむべきなり¹³⁾。

これは、日本の古典として『古事記』『日本書紀』『万葉集』を紹介する文章の中で、特に『古事記』について述べた部分である。

ここでは、『古事記』は、「神国日本の国体の根本義を明かにするもの」とされており、このような考えから『古事記』を国体を説明する際に用いているのである。また、『古事記』の中に「我等国民の精神の故郷を見出す」とあることから、『古事記』といえは、国体を明確に記し、国民精神の根本となる書物として扱っていたことがわかる。

このような考え方に基づいて、『古事記』の記事は、国体を説明する解説文においても様々に使われていたが、教科書の中で『古事記』自体について、国体の典拠であるということや、価値あるものであるということを示すことにより、『古事記』によって説明される国体を尊重すべきものとして提示することにつながっているといえる。

このように、皇国民として必要な国体観念の定着を図るにあたり、(1)から(5)のように、『古事記』の中から、天皇支配の正当性に関わる記事や、アマテラスやニギノミコト、神武天皇など天皇の祖先にあたる人

物などを用いて、日本の国体を外国とは異なる特別なものとして説明する文章を教材として用いていたのである。

2. 忠誠心の育成

次に、『古事記』から、ヤマトタケル、オトタチバナヒメ、タジマモリといった、天皇に対して忠誠心を持って働いた人物を取り上げることで、生徒達が天皇に忠実に仕える国民となる上での模範を示すような教材も行われている。以下で、それを詳しく見ていく。

(1) 忠義の戦士—ヤマトタケル

まず、模範的人物の一人目として教材化されているのが、ヤマトタケルである。ヤマトタケルは景行天皇の皇子であり、天皇の命令によって国内の賊を征伐するために、西征や東征を行った英雄である。このヤマトタケルを青年学校教科書に採録するに際して、その目的を指導書では、以下のように述べている。

古事記中より本章を撰んだことは、青年にて在す日本武尊の御東征の御有様の、徒に血気に満ち向ふ処に迷へる青少年に対し忠孝を教へ給ふ節を拝察せしめん為である¹⁴⁾。

ここでは、ヤマトタケルが天皇の命令に従って戦った忠義の戦士であるという点を強調し、青年学校の生徒の目指すべき姿として教えようとしている。

このように、ヤマトタケルを青年達の理想像として捉えていたことは、次の資料からもわかる。

若く美しき御生涯を天業翼賛の一路に艇身し給へる高貴なる英雄の神霊は、今や大日本の青少年の魂に燃える。熱情詩人として長く海外にあり空爆下のパリを脱出して帰朝した著者は青年社長として産業戦士の陣頭に立つと共に、二ヶ年の精進を傾けてこの御伝を完成した¹⁵⁾。

これは、昭和19年に発行された、『青少年日本文学日本武尊』という、青少年を対象とした本の広告文である。ここでも、ヤマトタケルは、「若く美しき御生涯を天業翼賛の一路に艇身し給へる高貴なる英雄」、つまり、天皇のために働き一生を捧げた人物として捉えられ、その「神霊は、今や大日本の青少年の魂に燃える」のように述べることで、昭和の時代の青年達にもヤマトタケルのように天皇のために働くことを求めているのであろう。

さらに、この本は次のような文章で締めくくられている。

日本武尊は、炳乎として千古を照らす日本精神の象徴におはします。そして今や、その御精神の永遠に微笑む世界の実現する時は、つひに来たのである¹⁶⁾。

このように、昭和戦前期においては、ヤマトタケルのように、国民みなが天皇に奉仕していくことが必要とされていたとわかる。

以上のように、ヤマトタケルが青年学校で教材化されるにあたっては、ヤマトタケルの戦う姿と天皇に対する忠誠心を、学習すべきものとして扱っていたのである。このヤマトタケルは、小学校、中学校、高等女学校、師範学校などすべての学校種において教材化されていた人物であるが、青年学校という兵役予備軍ともいえる学校においては、特に、忠義の戦士という面が強調されて教材化されていたといえる。

(2) 忠義の臣下—タジマモリ

次に、ヤマトタケルのように戦場で戦ったわけではないが、天皇の命令を忠実に遂行した人物として教材化されるのが、タジマモリである。タジマモリは、新羅の王子であった天之日矛の子孫であるが、垂仁天皇の命令により、常世の国へ橘を取りに行く。しかし、橘を携えて帰ってきた時には天皇が崩御していたために、その橘を御陵に捧げ、叫び泣き、そのまま死んだ忠義の人物である。この人物は、小学校、中学校、高等女学校、師範学校などすべての学校種で多く教材化されていた人物だが、青年学校においても採録されている。その教材文は以下のようなものである。

真に我が天皇のお求めになる不思議の果物だと、感心もし喜びもして実を取り、葉を取り、枝も取って、積まれるだけ船一杯に積込んで、早速この島を離れ、一刻も早く日本に帰って天皇に献上しようと、船を出した。

この度は北へ北へと走ったのだが、何千里とも知れない広い大洋であるから、いくら気はあせっても、風や浪は思ふまゝにはならぬ。帰りにも亦幾年かかゝって、往復十年でやうやう日本に到着した。いざ天皇の御感に預らうと、喜び勇んで上陸して見ると、かなしいかな、天皇は既にお崩れになって、最早幾年かたつてゐたのであった。

田道間守の失望はいはうやうも無い。困難が多かっただけ残念さも多い。折角長の年月の苦心も水の泡になったかと思ふと、残念で堪らない。男泣きに泣いて、天皇の御陵の前に、山の如くに蜜柑を積上げて、その前にひれ伏して、

「常世の国のかうばしい果物、あゝかうばしい果実、取って参りました。此処に持って参りました。あゝ我が君。」

と繰返し繰返し涙声を張上げて申しあげるけれども、地中の天皇は何とお答えが有らう。とうとうそのまゝ御陵の前に叫び死にをしてしまった。

あまりあはれな事としてこの果物に、田道間守の名

を取って橘と名を命けることになった¹⁷⁾。

これは、中学校などで教材化される際にも多く用いられていた再話作品である。教材化にあたって、原文でなく再話作品を用いるのは、生徒の学力への配慮と共に、再話の表現効果をねらったことである。

ここで、この教材文の表現を見てみると、下線部の「一刻も早く日本に帰って天皇に献上しよう」、「喜び勇んで上陸」、「失望はいはうやうも無い」、「繰返し繰返し涙声を張上げて」のような記述では、タジマモリの天皇に対する忠誠心を強調している。

また、「かなしいかな」、「あまりあはれな事」という記述では、この物語の悲劇性を強調し、感動的なものとしようとしている。

このようにタジマモリの忠誠心が強調され、感動的に演出された再話作品を用いることによって、青年学校の生徒に対して、タジマモリのような忠義の精神を効果的に教えることをめざしていたといえる。

(3) 自己犠牲—オトタチバナヒメ

最後に、(1)にあげたヤマトタケルの妃であるオトタチバナヒメも、教材化されている。このオトタチバナヒメは、夫ヤマトタケルに、賊平定という天皇の命令を遂行させるため、我が身を犠牲にして暴風雨の海を鎮めた人物である。そのため、小学校や高等女学校などで、天皇への忠義のために働く夫を助ける女性の模範像として多く取り上げられており、青年学校においても、女子用の教科書で教材化されている。その教材文を以下にあげる。

何をいかるかわたつみの

波わきかへる走水

橘姫はやゝしばし

祈を神に捧げつゝ

尊の御手を振りはらひ

逆巻く浪に入り給ふ¹⁸⁾。

これは、オトタチバナヒメの物語を短く詩の形で表したものである。この教材は、独立したのではなく、「古典四題」という題で、ニニギノミコト、神武天皇、聖徳太子についての歌と並んで採録されている。ここで、オトタチバナヒメ以外の、ニニギノミコト、神武天皇、聖徳太子について考えると、みな日本の国の統治に大きく関わった人物である。そのような中にオトタチバナヒメが入っているということは、オトタチバナヒメも、ニニギノミコトらと同等に、国体に深く関わった人物として扱われて教材化されているといえる。つまり、オトタチバナヒメの自己犠牲が、単に夫に尽くし、夫の危難を救ったというだけではなく、その犠牲が国を救ったのだということを表しているのであろう¹⁹⁾。

このように、昭和戦前期においては、オトタチバナヒメは夫ヤマトタケルと共に、天皇の命令遂行のために働き、国のために尽くした人物として捉えられ、この犠牲的精神を模範的なものとして身につけることを目指して教材化されていたといえる。

(1)から(3)のように、『古事記』からヤマトタケルなどの人物を、天皇への忠誠心などの模範として取り上げる教材化は、国民学校や中学校、高等女学校でもよく用いられた方法である。

青年学校教科書の中では、これらの人物の採録数は多くはないが、やはり『古事記』によって天皇や国家に対する忠誠心や犠牲的精神を育て、生徒が天皇のために働くことも目指されていたのである。

以上、1のように、天孫降臨や神武天皇の東征など、『古事記』の人物や出来事を用いて、国体について説明することで、神の子孫である天皇が統治する神の国日本という国体観念を育成するということが、青年学校における『古事記』教材化の大きな目標であった。

そして、その上で、2のヤマトタケルやタジマモリ、オトタチバナヒメのように精神面で模範となる人物を提示することで、1で育てた国体を尊重するために働く人物を育てようとしたのである。

III. 昭和戦前期青年学校における『古事記』教材化の特徴

以上のように、昭和戦前期青年学校において、『古事記』は、同年代を対象とした中学校や高等女学校では原文で採録されていたのに比べ、国体などの解説文の中で人物や出来事が多く使われていることがわかった。つまり、天孫降臨や神武天皇などによって、国体に関する内容を伝えたり、神勅などの重要な部分を引用するという採録方法によって、国体観念を育てることが目指されていた。この教材文の形態は、戦争末期になるにつれ、原文を重視し、古文の中から国民精神を見出させようとした他の校種の傾向とは明らかに違うものである。これは青年学校の生徒が、すぐにも産業界や戦場で働いて、日本を背負うことが期待されているということを反映して、国体についてわかりやすい形で直接教え込むという方法を用いたのであろう。

また、ヤマトタケルやタジマモリ、オトタチバナヒメのように、天皇に対する忠誠心や、国家のための自己犠牲的な精神を持った『古事記』中の人物を採録することによって、青年学校の生徒たちが、『古事記』の模範的人物のような精神を持って活躍することを求

めていた。

このように、青年学校という、社会に出ている生徒を対象とした学校においては、職場で生産などに役立つ実用的・技術的知識を学ぶ一方で、『古事記』は、天皇や国家のために働き、戦うのだというように、精神面において、国体観念や皇国民としての精神を育てるために教材化されていた。そして、その教材化の方法の特徴として、同年齢層の生徒を対象とした中学校や高等女学校においては、原文で扱われていたのに対し、この青年学校では、『古事記』から抽出された国体観念を強調した文章を与えることによって、皇国民としての心構えをより効果的に育てようとしていたといえる。

【注】

- 1) 『古事記』に登場する人物名で示す。なお、最後の「古事記」は、『古事記』そのものについて触れてあるものを示す。
- 2) 種類は、『古事記』からの人物・話題を含む文章が幾つあるかを示す。冊数は、その文章が何冊の教科書に採録されていたかを示す。
- 3) 『古事記』の文章をそのまま用いたものを「原文」、『古事記』の内容を現代語で物語形式に書き改めたものを「物語」、『古事記』の内容そのものを詩形式に書き改めたり、『古事記』の内容を詩に用いたものを「詩」、文章の中で『古事記』の内容を用いて論を展開しているものを「解説文」とした。
- 4) その形態の文章が何種類あったかを示す。
- 5) 筆者名なし「日本の肇国」石山脩平・海後宗臣・伏見猛弥『日本青年学校教科書 普通学科 普通科 二年制用 上巻』実業之日本社 昭和15年10月25日発行 1～4頁
- 6) 武田祐吉「物語日本文学古事記」島津久基『日本青年読本』成武堂 昭和16年4月1日発行 146頁
- 7) 芳賀矢一「日本の神話」石山脩平・海後宗臣・伏見猛弥『青年学校標準総合教科書 男子五年制用 巻二』実業之日本社 昭和13年11月25日発行 104頁
- 8) 芳賀矢一「建国の昔」大日本聯合女子青年団『青年学校教科書 修身及公民科 普通学科 本科女子 三年制用 巻二』大日本教化図書株式会社 昭和14年11月30日発行 93頁
- 9) 土井晚翠「光明は東より」東北六県教育会共編『東北青年学校教科書 修身及公民科 普通学科 男子本科五年制用 巻三』東文館 昭和14年12月15日発行 82頁

- 10) 筆者名なし「建国の日」帝都教育研究会編『青年学校国語読本 第一輯』東京教育書院 昭和11年4月20日発行 91～95頁
- 11) 阿部信行「紀元二千六百年を迎えて」穂積重遠編『青年学校教科書 普通科 普通学科 卷一』社会教育協会 昭和15年9月25日発行 71～73頁
- 12) 筆者名なし「古事記」島津久基『日本青年読本』成武堂 昭和16年4月1日発行 135頁
- 13) 重松信弘「日本の古典」満州開拓青年義勇隊訓練本部編『国語 下の巻』富山房 昭和18年7月15日発行 209～211頁
- 14) 筆者名なし「国語 六日本武尊」社会教育会編『標準青年教科書 教授用書 卷二』社会教育会 昭和10年5月30日発行 47頁
- 15) 国語と国文学編集部『国語と国文学』昭和19年1月号 卷末広告 至文堂
- 16) 鈴木啓介『青少年日本文学 日本武尊』至文堂 昭和19年1月10日発行 211頁
- 17) 澁川玄耳「かうばしい果物」秋田県青年教育研究会編『秋田県青年学校教科書卷一』東文館 昭和11年4月12日発行 70～72頁
- 18) 筆者名なし「八 古典四題 三、橘姫」大日本聯合女子青年団『標準青年学校教科書 本科女子三年制用 修身及公民科 普通学科 卷一』大日本教化図書株式会社 昭和14年3月30日発行 112～113頁
- 19) ここで、青年学校での学習に関わるものではないが、このオトタチバナヒメの物語が昭和戦前期において、どのように捉えられていたかを示す資料の一端として、美智子皇后の感想をあげる。

父のくれた古代の物語の中で、一つ忘れられない話がありました。

(中略)

悲しい「いけにえ」の物語は、それまでも幾つかは知っていました。しかし、この物語の犠牲は、少し違っていました。弟橘の言動には、何と表現したらよいか、建と任務を分かち合うような、どこか意志的なものが感じられ、弟橘の歌は「私は今、それが子供向けに現代語に直されていたのか、原文のまま解説が付されていたのか思い出すこと

が出来ないのですが—あまりにも美しいものに思われました。「いけにえ」という酷い運命を、進んで自らに受け入れながら、恐らくはこれまでの人生で、最も愛と感謝に満たされた瞬間の思い出を歌っていることに、感銘という以上に、強い衝撃を受けました。はっきりとした言葉にならないまでも、愛と犠牲という二つのものが、私の中で最も近いものとして、むしろ一つのものとして感じられた、不思議な経験であったと思います。

この物語は、その美しさの故に私を深くひきつけましたが、同時に、説明のつかない不安感で威圧するものでありました。

古代ではない現代に、海を静めるためや、洪水を防ぐために、一人の人間の生命が求められるとは、まず考えられないことです。ですから、人身御供というそのことを、私が恐れるはずはありません。しかし、弟橘の物語には、何かもっと現代にも通じる象徴性があるように感じられ、そのことが私を息苦しくさせていました。今思うと、それは愛というものが、時として過酷な形をとるものなのかも知れないという、やはり先に述べた愛と犠牲の不可分性への、恐れであり、畏怖であったように思います。

まだ、子供であったため、その頃は、全てをぼんやりと感じただけなのですが、こうしたよく分からない息苦しさが、物語の中の水に沈むというイメージと共に押し寄せて来て、しばらくの間、私はこの物語にずい分悩まされたのを覚えています。

美智子『橋をかける 子供時代の読書の思い出』すえもりブックス 平成10年11月25日発行 10～13頁

この文章では、ヤマトタケルとオトタチバナヒメの愛と犠牲ということに焦点が当てられているが、「任務を分かち合う」という箇所からは、オトタチバナヒメが単に自己犠牲によって夫を救ったというだけでなく、夫とともに任務を果たそうとした人物として捉えられていることがわかる。

(主任指導教官 吉田裕久)